

立正大学博物館第十五回企画展

瓦塔と瓦堂



2021

立正大学博物館

ごあいさつ

第15回企画展は「瓦塔と瓦堂」である。瓦塔と瓦堂は、古代の仏教信仰、とりわけ村落社会における信仰の実態を示すものとして、多くの研究者によって注目されてきた。瓦塔と瓦堂は、屋根瓦が葺かれた様子や建築の組物を粘土で表現しており、木造建築を模倣したことがあきらかである。いわば木造塔婆と金堂を粘土で再現したわけで、仏教寺院のミニチュアとしての側面をもつことがあきらかで、仏教寺院への憧憬に近い熱い信仰を感じさせる。今回は、立正大学博物館の館蔵品をはじめ、熊谷市周辺地域の資料を展示することができた。関係者のご好意に深謝したい。この機会に、瓦塔と瓦堂の実物をご覧いただき、古代の仏教信仰のあり方に思いを馳せていただければ幸甚である。



2021年12月

立正大学博物館
館長 時枝 務

目次

はじめに	1
1 仏塔の成立と展開	2
2 瓦塔とは何か	6
3 瓦塔と瓦堂が建てられたところ	10
4 瓦塔と瓦堂が造られたところ	16
おわりに	25

凡例

- 1 本書は第15回企画展「瓦塔と瓦堂」（会期：令和3年12月2日（）～令和4年1月31日（））の展示図録である。
- 2 本図録の作成は、館長・時枝務、学芸員・足立佳代が執筆し、館長のもと足立が編集した。
分担は、時枝が「はじめに」「1 仏塔の成立と展開」「2 瓦塔とは何か」を、その他を足立が担当した。
- 3 本図録に掲載した遺物及び遺構の写真は、所蔵機関に借用したほか、一部足立と高橋杜人が撮影した（※表記）。
- 4 本図録に用いた引用・参考文献は、巻末に掲げた。
- 5 展示にあたっては、浅見幹雄（本館事務職員）、奥村敦至（本学学生）が手伝った。
- 6 本図録の転載はご遠慮ください。

協力者・機関

坂詰秀一初代館長 池上 悟二代目館長
新井 端 新井雅幸 池田敏宏 井上尚明 大谷 徹 蔵持俊輔 腰塚博隆 高橋杜人
手島芙実子 野中 仁 増田 修 吉野 健 若島大輔
熊谷市教育委員会 埼玉県教育委員会 さきたま史跡の博物館 鳩山町教育委員会
立正大学 考古学研究室 熊谷総務課 熊谷学術情報課

*表紙の写真は、東山遺跡出土の瓦塔と瓦堂（写真提供：埼玉県教育委員会）、唐草文は新沼窯跡出土軒平瓦。裏表紙は新沼窯跡出土の瓦塔屋蓋部

はじめに

瓦塔とは、奈良時代から平安時代に製作され建てられた仏塔です。瓦堂は、瓦塔と同時期の仏堂です。いずれも木造塔、木造堂を模して粘土で形づくられ焼成されました。

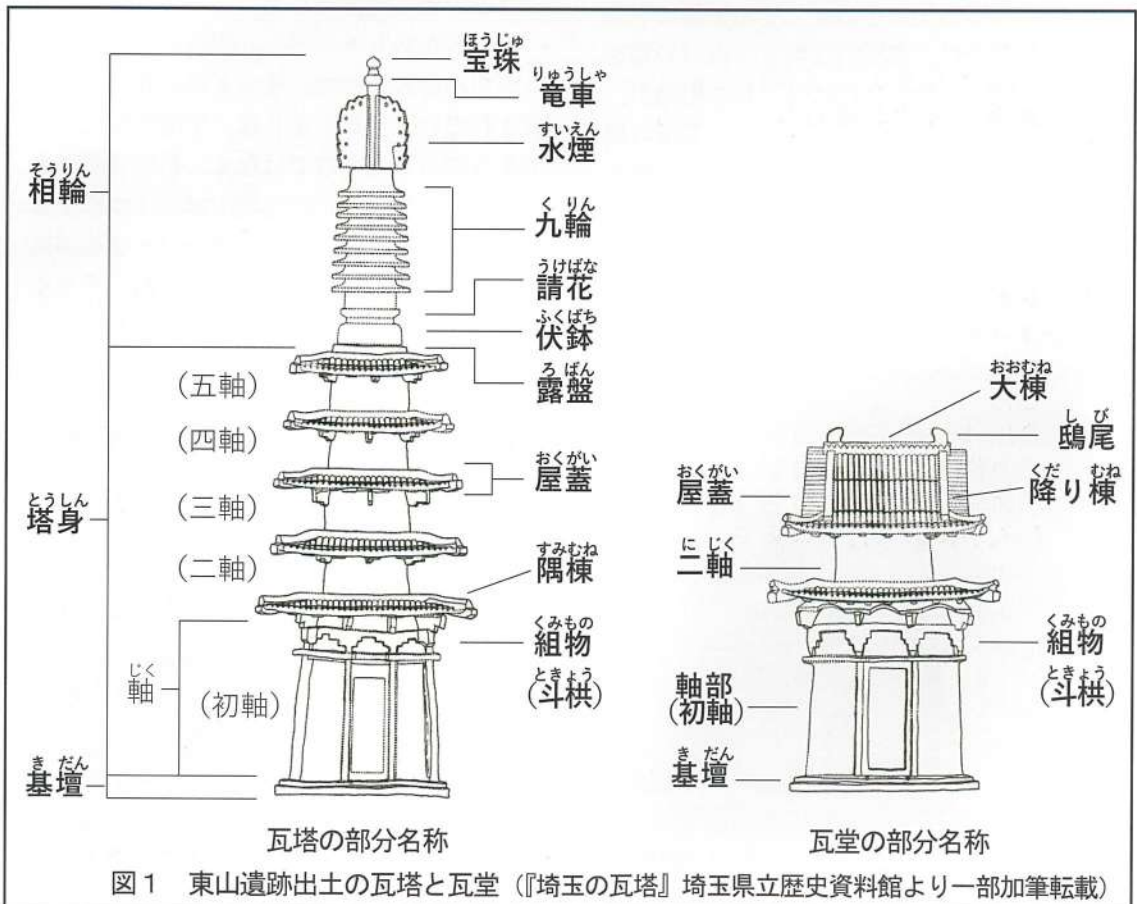
瓦塔は五重塔または七重塔を模しており、1.5～2.3mほどの高さです。日本最大の東寺五重塔が54.8m、最小の室生寺五重塔が約16mですから、木造塔の十分の一から二十分の一のミニチュアです。

瓦塔の出土地は、古代寺院跡や集落、山頂などで、その性格には諸説あり「2 瓦塔とはなにか」に詳しく記述してあります。

瓦塔は、全国で約200カ所の遺跡から出土し、その大半が関東、東海、北陸地方に集中しています。関東では特に埼玉県での出土例が多く、50カ所以上に上ります。

東山遺跡から出土した瓦塔と瓦堂は、両方がそろって復元できた例として大変貴重です。遺跡は、美里町大字甘粕字東山、標高90mの甘粕丘陵上に所在しました。周囲には式内社・みか神社、駒衣廃寺跡、万葉遺跡さらし井等があり、古代那珂郡の中心でした。

瓦塔と瓦堂は、集落内の小堂・2間(3m)×1間(1.5m)の掘立柱建物に安置されていたと考えられます。本格的な寺院は建立せず、集落内の仏教信仰の拠り所として瓦塔と瓦堂が祀られたのでしょう。



1 仏塔の成立と展開

①インドの仏塔

仏塔は、仏教のシンボルとして、釈迦の故郷インドで生まれました。

仏塔には、仏舎利を有するストゥーパと、仏舎利をもたないチャイティヤの2種類があり、一般的に仏塔と称されるのはストゥーパです。

ストゥーパは、釈迦の死後、荼毘に付して分骨した舎利やその容器などを祀るために造営されたもので、サンチーやアマラバティーの仏塔は、初期の仏塔の様相をよく留めているといわれています。

サンチーの仏塔のうち第2塔は、方形の基壇上に饅頭形の伏鉢をのせ、その頂部に平頭と傘蓋を据えた、典型的なストゥーパの姿をみせています。傘蓋は柱に付された相輪が、樹木のイメージを髣髴とさせます。基壇の周囲には、繞道が敷設され、その外側に欄楯が巡らされ、四方には楼門であるトラナが設置されています。しかも、トラナには、豊満な女神像が彫刻され、一見仏塔の彫刻とは思えないナイーブな世界を展開しています。

ストゥーパは、釈迦の墳墓として造営されたのが最初であるとされていますが、在家信者のためのモニュメントとして造営されたことを見落としてはなりません。仏教の悟りの世界にふさわしくなさそうな女神像などは、仏教以前の民間信仰に由来するもので、在家信者にとって親しみのある存在でした。また、枝を広げて成長する樹木のイメージは、やはりストゥーパ以前の宗教観念に通じるもので、世界を支える宇宙樹の形象であると説く学者もいます。

ところで、出家集団が集うためのヴィハーラは、のちにストゥーパと対をなして仏教寺院を構成することになりますが、当初は僧侶の生活と勉学の場でした。ストゥーパが立派なモニュメントであったのに対して、ヴィハーラは簡素な建物でした。

世俗的なストゥーパと、脱俗的なヴィハーラが組み合わせあって、インドの仏教寺院は構成されていました。それは、平地寺院においてそうであっただけではなく、石窟寺院においても同様です。石窟寺院では、1つのチャイティヤ窟を中心に複数のヴィハーラ屈が営まれ、1つの寺院が形成されました。チャイティヤ窟が楕円形プランであるのに対して、



図2 サンチー第2塔

ヴィハール屈は方形プランで、設計原理が異なっていたのです。

しかし、ストゥーパもチャイティヤも、形態に大きな差はなく、舎利の有無だけで名称が変わるのが、インドの作法であるらしい。石窟寺院の仏塔は、チャイティヤ窟の奥に存在しますが、岩から削り出されたものです。

こうして、仏塔はインドで成立しましたが、その姿は、その後派生したさまざまな仏塔とは必ずしも似ていません。

②中国の仏塔

インドに近いスリランカ・ミャンマー・タイ・ラオスなどでは、インドのストゥーパを基本的に踏襲した、パゴダ・チェディ・プラン・モンドップ・タートなどの仏塔が造立されました。ストゥーパは、インドから東西へ遠く伝播しましたが、そのうち東へ向ったグループは中国で大きな変容をみせました。

中国では、古代から楼阁建築が発達していましたが、それがストゥーパと習合し、新たな塔婆の形態である層塔が生み出されたのです。層塔は、ストゥーパの基壇を露盤に変換し、その下に屋根を何層にも重ねて造形され

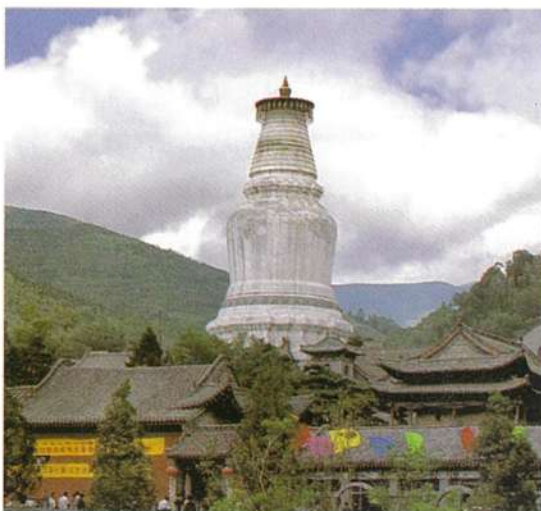


図3 五臺山第幾鎮

ました。三重塔・五重塔・九重塔・十三重塔など、屋根と身を重ねることで、何種類もの独自の塔婆を作り上げました。一見、ストゥーパと層塔は別物のようにみえますが、よくみると一番上の屋根から上は露盤・伏鉢・平頭・傘蓋・相輪というようにストゥーパそのものが載っていることに気がきます。しかも、仏舎利を納める風習も廃れることなくおこなわれ、仏塔の地下に設けられた地宮などから仏舎利の遺宝が発見されることがしばしばです。なお、古代中国の舎利容器は、お棺を模した銅製の容器に納められることが多くみられます。

現存する中国の木造塔でもっとも古いものは、おそらく山西省応県仏宮寺の五重塔で、遼の清寧2年(1056)に造立されたと伝えられています。平面は八角形で、各層ごとに床が貼られ、仏像が祀られています。初層には裳階(もこし)が付されており、わが国の法隆寺と共通することは、見過ごせない特色です。

しかし、中国では木造塔は少なく、大部分は磚を積み上げて建てられた多層塔(たえんとう)です。天に向かってとがっているような多層塔の形態は中国独自のもので、古いものは唐代に遡ります。現存するものには、木造塔よりも古いものがみられ、中国の塔婆を代表する存在となっています。

また、雲崗や龍門などの石窟寺院では、石窟内に塔を安置する石窟がみられます。塔形は層塔が一般的で、木造塔を模している可能性が高いところから、木造層塔の起源が北魏まで遡ることが推測できます。なお、塔を本尊とする石窟寺院は、インドのチャイティヤ窟の系譜を引くものと考えられます。

さらに、中国では、唐代の三彩小塔など、焼き物の塔婆がみられることは、瓦塔のルーツを探る上でまことに興味深いことといわね

ばなりません。もっとも、楼閣建築を表現した焼き物が、漢代に出現していることを考えれば、伝統的な現象といえるかもしれません。

このように、中国では、磚で表現される層塔が生み出され、陶製の塔婆も製作されましたが、瓦塔そのものは現在のところ発見されていません。

③朝鮮半島の仏塔

インドから中国を経て、朝鮮半島に仏塔が伝播した時には、もっぱら層塔が主体で、本来の塔形であるストゥーパとは形態上別物ばかりでした。ただ、それが、仏教のシンボルとして礼拝の対象であり、舍利を内蔵するという点では、ストゥーパの伝統を伝えるものであったことも確かといえます。

朝鮮半島の古代の木造塔は現存しませんが、古代寺院遺跡の発掘調査で痕跡が確認されており、建物の平面プランなどを知ることができます。北朝鮮の平壤近郊の清岩里廃寺（金剛寺）は、塔を中心に三基の金堂が囲む伽藍配置でしたが、塔は平面八角形プランでした。



図4 高仙寺跡 三層石塔
(韓国国立慶州博物館)

同様な形態の塔婆は、大同江流域を中心に複数確認され、高句麗の典型的な塔婆であったとみられます。

高句麗では木造塔が主体であったのに対して、百済と新羅では木造塔に加えて、新たに石造層塔が盛んに営まれました。その伝統は、統一新羅時代まで続き、木造塔よりも普遍的な存在となりました。

現在の韓国の扶余は百済の首都でしたが、そこにある定林寺には、石造の五重塔が現存しています。細部を観察すると、木造建築を模したことがあきらかで、木造塔が先行したものと考えられます。百済では、7世紀前半に、木造塔に代わって石塔が台頭していたのです。

同様な動きは、新羅においても認められ、義城塔里の石造五重塔が著名です。その流れを汲み、統一新羅時代に下るものに仏国寺の石造三重塔があります。その端正な姿は、7世紀後半を代表するものといえ、韓国古代の伝統をなしています。

新羅では、石塔のほかに磚塔（せんとう）が存在し、なかでも松林寺五層磚塔は著名です。磚塔は、中国の多簷塔に由来することはあきらかですが、その形態は同じとはいえません。芬皇寺の石塔は、石材を磚のような形態に加工して積み上げたもので、石塔でありながら磚塔の系譜に属しています。芬皇寺石塔のようなキメラ的存在が登場した背景には、多簷塔を重んじる中国的価値観を採用するか、石塔を重んじる朝鮮半島独自の価値観を尊重するか、葛藤があったことを知ることができます。

ところで、朝鮮半島の仏塔は、木造塔にせよ、石塔にせよ、層塔が主体を占めています。しかし、それは統一新羅時代までのことで、高麗時代に入ると独自の形態の石塔が出現します。なかには、墓塔としてのものもみられ、

機能的にも多様化しています。しかし、その実態はあきらかでない部分が多く、その解明は今後の課題として残されています。

④日本仏塔の多様性

日本最初の仏塔は、『日本書記』によれば「大野寺の塔」ですが、その実在には疑問が呈され、確実なのは飛鳥寺のものです。飛鳥寺の塔婆は、『日本書記』によれば 593 年に舍利が納められたといえますから、その頃創建されたのでしょう。飛鳥寺の伽藍配置は、清岩里廃寺と同じなので、高句麗の影響のもとに営まれたこととなります。飛鳥寺の塔が層塔であり、地下に舍利が納められ、舍利に宝物が添えられたことはいまでもありません。

その後、日本の古代においては、木造層塔が塔婆の主流でした。法隆寺五重塔に代表される層塔が現存しますが、大部分が裳階を伴うものです。法隆寺五重塔では、人字形割束など北魏様式を伝える要素が色濃くみられ、いかにも古拙な美を醸し出しています。

奈良時代には、木造塔でも、元興寺や海竜王寺に残されている木造小塔のような小規模な塔婆がみられ、瓦塔の原型となった可能性が指摘できます。もっとも、その頃には奈良

市塔の森の八角形石塔をはじめ石塔も出現しますが、必ずしも一般化しませんでした。総じて、奈良時代は、木造層塔の時代であったといえるでしょう。瓦塔も木造層塔の代替品としての性格をもつ可能性があります。

それが大きく変化するのは、平安時代後期、11～12 世紀のことです。塔形でいうと、宝塔・五輪塔・宝篋印塔・笠塔婆・板碑・宝幢などが該当し、やや遅れて 13 世紀に無縫塔などが加わります。五輪塔・笠塔婆・板碑などは、木製品が逸早く出現し、やがて石塔が主流となります。石川県野々江本江寺遺跡で木製笠塔婆と板碑が発見されて以来、『餓鬼草紙』の世界が実際のものであることがあきらかになりつつあります。

なぜ、11～13 世紀、すなわち院政期にさまざまな塔婆が出現するのでしょうか、その理由は不明ですが、中世の幕開けとともに塔形のバリエーションが豊富になることは確かです。古代には層塔がもっぱらであったのに対して、中世には実にさまざまな塔形が乱立するようになり、まさに塔婆の時代といっても過言ではありません。

それらのうち、宝塔・五輪塔・笠塔婆・板碑が日本独自のものである可能性が高いのに対し、宝篋印塔・無縫塔・宝幢は中国からもたらされたとみられ、両者は出自を異にすると考えられます。前者のグループでは、たとえば板碑に注目すると、定型的板碑が出現する以前に、板碑に類似した板石塔婆が九州地方などに散見され、12 世紀が板碑の形成期であったことが知られますが、同様なことは笠塔婆などについてもいえます。

いずれにせよ、瓦塔はそうした中世的な塔婆ではなく、木造層塔を重視した古代仏教の伝統のなかにある塔婆であるといえるでしょう。



図5 興福寺五重塔

2 瓦塔とはなにか

①瓦塔研究の軌跡

瓦塔の存在が考古学界で知られるようになったのは明治40年代のことで、五輪塔や板碑などが近世の随筆にみえるのと違い、案外に新しいことです。

本格的な報告は、1927年の谷川磐雄「二・三の土製多重塔に就いて」(『考古学雑誌』17巻2号)ですが、そこでは瓦塔ではなく土製多重塔の名称が用いられています。

「瓦塔」を使用したものとしては1930年の鈴木鱗「太古以来の遺跡小丸山開掘私記」(『上毛及上毛人』156・158・161号)が早い例ですが、上毛地方の郷土雑誌に掲載されたこともあり、広く知られることはありませんでした。

翌年、柴田常恵は、「瓦塔」(『埼玉史壇』2-4)を公刊し、関東から東海の瓦塔の事例を紹介しました。掲載雑誌が地方誌であったにも拘わらず、大きな反響を得ました。それは、柴田が文部省嘱託として史跡指定に関与し、文化財行政において著名であったことによると思われます。

同年、東京帝室博物館で奈良時代展がおこなわれ、その豪華版図録として刊行されたのが『天平地宝』です。そのなかで石田茂作は、瓦塔について詳細な解説をおこないました。このことが、瓦塔の名称を確定したのではないかとみられますが、定かではありません。

このように、瓦塔の名称が定着した背景には、柴田常恵と石田茂作の力があってと考えられ、名称をめぐる研究史上の画期は1931年であったとみられます。その頃は、仏教考古学の隆盛期で、多くの人々が仏教遺物に関心を寄せたことも瓦塔の名称を広める契機となったのでしょう。

その後、戦時期となって瓦塔の研究も鎮静化しますが、戦後平和の到来とともに瓦塔の研究も再開されます。戦後の研究では、1952年に刊行された神田義男・中山千代「千葉県印旛郡長熊廃寺址発掘調査報告」(『銅鐸』9号)が報文中で瓦塔に言及していますが、この文献は立正大学における瓦塔研究の嚆矢でした。

その後1956年に、石村喜英は、「高柿山の瓦塔遺跡について」(『史迹と美術』266号)を発表し、墳墓標識説を提唱しました。石村は、瓦塔は墳墓の上に立てられるもので、墳墓の標識に他ならないと説いたのです。

それに対して、立正大学の坂詰秀一は1956年に「瓦塔雑考—墳墓標識説への疑問—」(『立正考古』10号)、翌年には「瓦塔についての一考察」(『貝塚』79号)を公にし、石村の提唱する瓦塔墳墓標識説への反対意見を開陳し、インドのチャイテイヤと同一の性格であろうとしました。

石村は瓦塔に関する多くの論文を執筆しましたが、そのなかで「瓦塔と泥塔」(『新版考古学講座』第8巻(雄山閣出版、1971年))と「瓦塔」(『新版仏教考古学講座』第3巻(雄山閣、1976年))は、瓦塔の概説というべきものです。なお、石村は、後年になっても、瓦塔の性格を墳墓標識と考えていたようで、自説を譲ることはなかったとみられます。

その後、瓦塔の研究は下火となり、10年ほどの中断期を迎えますが、1989年になってようやく登場したのが高崎光司「瓦塔小考」(『考古学雑誌』74巻3号)です。高崎は、三手先斗棋の表現の変化に注目し、瓦塔の編年をおこないました。高崎の型式学的な研究以後、その方法に学び、池田敏宏ら多くの研究者が瓦塔を論じるようになりますが、膨大な量になるので、ここでは省略しましょう。

②瓦塔の定義

考古学者は、瓦塔をどのように定義してきたのか、まずは考古学辞典を引いてみましょう。辞典の記載を手がかりに、瓦塔とはなにかを考え、正しく理解するための一助したいと思います。

『図解考古学辞典』（東京創元新社、1959年）で「瓦塔」を引くと、京都大学の著名な考古学者である小林行雄の執筆で、次のような定義がなされています。それは、「瓦塔というが、実は須恵器の塔である。木造層塔の形を模して、各層ごとに分解して焼き、あとで組み立てられるようになっている」というものですが、実際には瓦質のものもあるので冒頭から妥当とはいえない定義です。

『仏教考古学事典』（雄山閣、2003年）で「瓦塔」を引くと、立正大学出身の松原典明の執筆で、次のような定義がなされています。それは、「奈良、平安時代を中心として、粘土製の還元焰で焼成した1～2mの仏塔の一種。木造重層塔婆を模したと思われる。五重塔が主だが七重塔もある。材質は須恵質のものど土師質のものがある。構造は、基壇部、軸部、斗栱部、屋蓋部、相輪部に分けることができる、各部は個別に焼かれ、中心柱を基台上に立て、軸部、屋蓋部を順次交互に積み上げ合わせるように造られている」というものであり、土師質の瓦塔の存在に言及している点で、『図解考古学辞典』の定義を否定するものといえるでしょう。

『日本考古学事典』（三省堂、2006年）で「瓦塔」を引くと、奈良文化財研究所の金子裕之の執筆で、「小型の焼物の塔。柴田常恵がこの名で呼んだが、須恵器工人の製品である」と定義しており、基本的には『図解考古学辞典』の定義を踏襲しています。泥塔とは比較にならないほど大きい瓦塔を、小型の塔といえるかなど疑問はありますが、松原の指摘す

る土師質のものも含めて「須恵器工人の製品」といえることから、この点は一見識であるといえるでしょう。

『歴史考古学大辞典』（吉川弘文館、2007年）で「瓦塔」を引くと、奈良文化財研究所の毛利光俊彦の執筆で、「粘土を素材として焼成した総高一～二丈の瓦製の塔。五重の木塔を模したものが主であり、通常は軸部・屋蓋部・相輪部に分けてつくる。内部は中空であり、木製の心柱を芯として立て、軸部・屋蓋部を交互に積み重ねたのち、頂部に相輪部を差し込んだと推定。内壁に仏像を表現した例もある。ほかに六角塔や円形の宝塔のような例も出土しているが、破片である例が多く詳細は明らかでない」と定義しています。

このように、瓦塔の定義を辞書で確認すると、時代とともに変化してきたことが判明し、やはり最新のものがよくまとまっている印象を受けます。

小さな建築・瓦塔

瓦塔は、木造塔を模したもので、細部まで木造建築の構造をていねいに表現しています。木造塔の大部分は、法隆寺の五重塔のように巨大なものですが、元興寺や海竜王寺の木造小塔のような工芸品的な木造塔も知られています。木造小塔は、仏堂内部に安置されてきたものですが、大型の塔婆の代替品である可能性が高いです。

経済的な理由などで木造小塔が選ばれたのでしょうか、瓦塔もまた、大型木造塔よりも廉価で造立可能であり、おそらく小型木造塔よりも低コストであったのではないのでしょうか。

このように、瓦塔は、中世の板碑などとは異なり、小さな建築としての側面をもっていたのです。

まず、全体の形態をみると、軸部と屋根部

を繰り返し、最上部に相輪が設けられます。それは、木造層塔以外のなにものでもありません。つぎに、細部をみると、より一層木造建築との深い関係がみえてきます。軸部には、基壇のうえに地長押が置かれ、入口の上部には内法長押が巡らされ、屋根を支える部分には台輪が載せられ、その上には斗栱が組まれています。

屋根部には、下側に垂木が配され、上側には瓦を葺いた状態が半裁竹管で施文されます。棟の瓦までていねいに表現しており、軒瓦を具象的に表現したものも、少ないものの存在します。

頂部には、露盤・伏鉢・受花・九輪・水煙・竜車・宝珠が重なり、中央を擦管が貫通します。当然のことですが、木材のみでなく、瓦や金属製の相輪部など、異なる材質の部分もすべて瓦製であるところに瓦塔の特色があります。

ところで、瓦塔が盛んに造立された奈良時代後期から平安時代前期は、木造層塔の現存例が少ないのです。奈良時代後期はまだしも、平安時代初頭には室生寺五重塔くらいしか思いつかないほど、稀少なものになります。模倣して造った瓦塔から、模倣された木造塔を復元してみることも、案外に重要なことといえます。この時期の実物の木造塔が残っていない以上、瓦塔は、木造塔を研究するうえでも、またとない重要な資料なのです。

しかし、瓦塔が木造塔をていねいに模しているとはいっても、所詮は粘土で造った焼物の塔婆です。本物の木材で造るようにはいかず、木造建築を象って粘土板で表現した部分が多く、瓦塔から木造塔を復元する作業は思うほど容易ではありません。木造塔は、部材と部材が関連しあって、全体として構造体を形成しています。それに対して、瓦塔は、粘土板の寄せ集め以外の何物でもありません。

模倣といっても、材質が異なる場合、大きな制約があることが知られるのです。瓦塔は、小さな建築と形容できるような精巧な仕上がりではありますが、本物の建築ではないのです。

瓦塔の性格

石村喜英は、瓦塔の性格を大きく5つの学説に分け、それぞれに解説を加え、最終的には墳墓標識説の可能性が高いとしていると受け止めることができます(石村 1976)。石村に従って、各説の概要を紹介し、瓦塔の性格を理解する手がかりとしてみましょう。

①衆縁勸募説

石田茂作によって唱えられたもので、寺院建設予定地に、寺院に先立って瓦塔を造立し、それを礼拝させて浄財を募ったとする見解です。石村はその可能性を否定します。

②造塔信仰説

研究史で紹介したものでは坂詰の学説が該当し、要は塔婆に対する信仰と解するもので、ある意味汎用性があるといえます。石村は、この点をつき、瓦塔としての特色があきらかでないとして批判しています。

③塔婆代用説

柴田常恵が説いたもので、高い木造層塔の代用品として瓦塔を造立したとするもので、経済的に劣位な担い手が想定されています。石村は、寺院跡以外の場所から瓦塔が発見されていることを根拠に、この学説が成立する可能性を否定しています。

④想定墳墓説

鈴木鱗が主張した説で、瓦塔は墳墓に造立されたとするもので、いわば瓦塔を墓標とみなす立場であり、次の墳墓標識説と何等変わらないように思いますが、石村は両説を区別して扱っています。

⑤墳墓標識説

石村が提唱する説で、墓塔か、供養塔として造立されたというものです。石村は、この説で瓦塔の性格を説明できるとしており、結論を出しています。石村によれば、瓦塔は、墓塔、もしくは供養塔です。

ところが、石村の自信とは裏腹に、この説は大きな問題を孕んでいました。それは、共伴したとされる骨蔵器の年代であり、石村が想定したような同時代のものではなかったことです。時代の乖離が著しいものでは、13世紀の古瀬戸四耳壺まで含まれており、文字通り共伴する板碑さえ確認されています。確かに、同じ場所から出土したかもしれませんが、共伴したわけではなく、瓦塔よりも後世の所産であることはいうまでもありません。石村

は、型式学的な検討を経ずに、共伴関係を認定してしまったのです。

では、瓦塔は、どんな性格をもっているのでしょうか。手がかりは、出土地の地形と景観にあるように思いますが、いかがでしょうか。たとえば、埼玉県ときがわ町多武峯の例は独立丘頂上の岩場にある平場、静岡県三ヶ日町宇志の例は山腹の山林寺院の一画、東京都東村山市の例は丘陵頂部です。それらは、なんらかの聖地に建てられたもので、瓦塔は聖地の表象であったのではないのでしょうか。それだけに納まりきれないものもありますが、瓦塔が石村の云うような存在でないことは、それだけの事例からも指摘することができます。



図6 本図録で紹介する遺跡の位置図

3 瓦塔と瓦堂が建てられたところ

2章で述べたように、瓦塔が建てられていた遺跡は、さまざまです。ここでは立正大学博物館の所在する熊谷市域で出土している瓦塔と瓦堂を紹介します。

①幡羅官衙遺跡群

熊谷市の北西部、深谷市にまたがる櫛挽台地北縁の田園地帯に所在する遺跡です。古代の幡羅郡の官衙（役所）と考えられ、長年の発掘調査の成果によって平成30（2018）年に国史跡に指定され、その範囲は、102,110.98㎡に及びます。遺跡の構成は、幡羅官衙遺跡、西別府遺跡、西別府祭祀遺跡、西別府廃寺跡からなり、飛鳥時代から平安時代にかけてこれらが一体となって幡羅郡の施設として機能していました。

幡羅官衙遺跡・西別府遺跡は、幡羅郡の役

所として掘立柱建物群、税として納められた稲を保管する正倉院などが確認され、郡家の政庁が存在する可能性があり、幡羅郡家の中心地と考えられます。

西別府祭祀遺跡は、湯殿神社が位置する台地の縁辺にあり、7世紀後半から11世紀前半まで続けられた祭祀の様子がうかがえます。湯殿神社の裏手の湧水点を中心に石製模造品や土師器、須恵器が数多く出土しています。古墳時代以来の伝統的な石製模造品を使った水辺の祭祀が、9世紀後半には願文や吉祥文を書いた木簡や墨書土器を用いた祭祀に変遷する様子が明らかとなりました。これは、郡家の整備に伴って、集落の祭祀から郡家の祭祀へと移り変わったことを示すものと考えられます。

西別府廃寺は幡羅官衙遺跡の東にあり、8世紀初頭から9世紀後半まで続いた寺院跡です。郡家に接することから、郡寺として機能していたと考えられています。

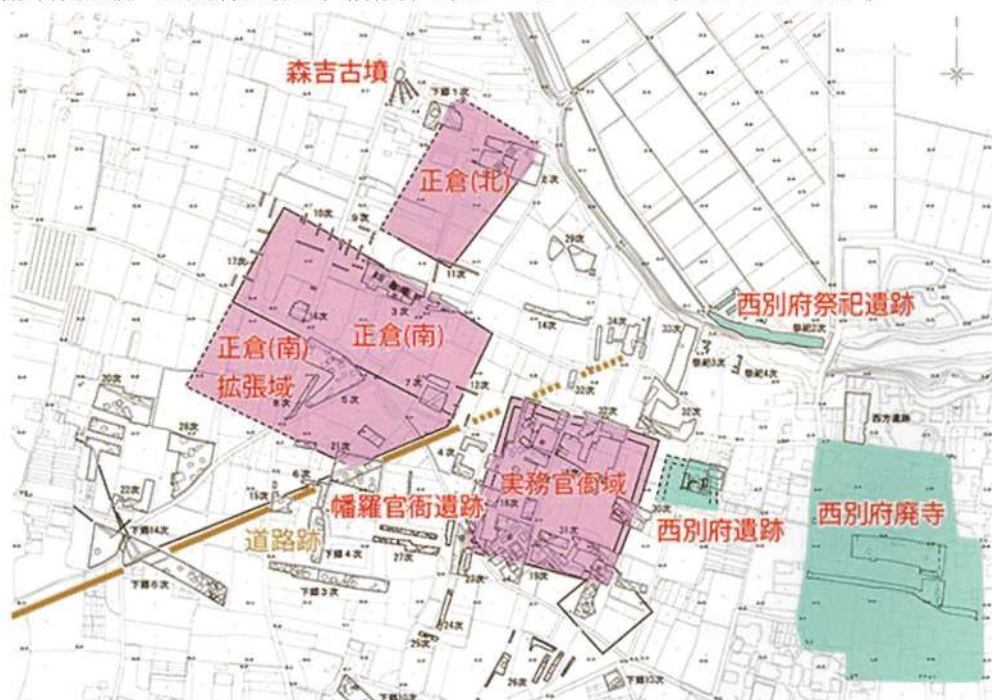


図7 幡羅官衙遺跡群遺跡配置図

平成2(1990)年、4(1992)年の発掘調査によって、寺院跡であることが明らかにされました。寺域は東西150m、南北200mの範囲で、寺域を画する幅約5mの溝が西側で確認されています。

寺域内では、基壇を持つ建物跡が2棟あり、そのうちの1棟は東西10m前後、南北5.2m以上の規模と推定されています。基壇は、暗灰褐色土、灰黄褐色土、青灰色土、黒灰色土を交互に堅く搗き固めた版築工法により造成されていました。竪穴建物跡は6棟あり、製鉄炉を持つ建物跡も確認されています。このほか、寺域内を区画する溝や瓦溜り状遺構などが確認され、官寺である国分寺と同じ瓦、土器、瓦塔片、羽口、鉄釘等が出土しました。

発掘調査の成果から、西別府廃寺は、7世紀第3四半期後半ごろに幡羅評家が成立、その後郡家成立にやや遅れた8世紀第1四半期

に一般集落であった地に寺院が建立されたと考えられています。創建当初は小規模な寺院であったものが、8世紀前半に本格的な寺院の整備が始まり、8世紀第2四半期になると、一層整備が進み、9世紀前半頃までは堂塔の建替え、区画の拡張が行われるなど、伽藍の充実が図られました。9世紀後半頃までは伽藍がありましたが、その後は衰退します。

瓦塔は、西別府廃寺跡から複数個体が出土し、還元焰焼成された須恵質の製品と酸化焰焼成された土師質の製品に大きく分けられます。須恵質の瓦塔は大型で、造りがしっかりしています。軸部の組物は立体的に造形され手が込んでいます。土師質の製品には、白色を塗ったものも見られます。また、破片ですが、瓦堂も含まれています。須恵質の胎土には後述する白色針状物質が観察され、南比企窯跡群の製品と推定されています。



図8 幡羅官衙遺跡群空中写真



図9 基壇建物跡出土状況



図10 瓦溜り出土状況



図11 基壇版築の断面



図12 西別府廃寺出土の瓦塔と瓦堂



図13 西別府廃寺出土の瓦塔軸部*

瓦塔・瓦堂の年代は、形態などから、須恵質の製品が8世紀後葉から9世紀初頭、土師質の製品が8世紀末葉から9世紀中葉に位置づけられています。

木造塔の再建にあたって、代用として建てられた可能性も指摘されています。寺院内の堂塔内や屋外に瓦塔や瓦堂を安置し、宗教活動が行われていたことを示しています。

②寺内廃寺

寺内廃寺は、熊谷市の南、荒川右岸の江南台地北縁にあります。周辺には「寺内」、「鐘撞き堂」、「堂の下」の地名が残っており、寺院があったとの伝承がありました。平成3（1991）年から4（1992）年にかけてゴルフ場造成に伴い江南町教育委員会及び江南町千代遺跡群発掘調査会によって発掘調査されました。

発掘調査の成果により、北辺570m、東辺170m、西辺200m、面積約129,000㎡という広大な古代寺院跡であることがわかりました。寺域は幅6mの溝で区画され、区画の内部はさらに南北230m、東西165mで区画され、金堂、講堂、中門、塔の跡と推定される基壇建物跡が確認されています。伽藍は、講堂、金堂、中門が南北に並び、金堂の東に東塔が配されていたと考えられています。

金堂と推定される建物の基壇は寺域のほぼ中央に位置し、推定幅15m、奥行き13.5m、

礎石配置からは三間四面庇付建物で5間（12m）×4間（9.8m）の建物であったと考えられます。

金堂の背後に位置する講堂と推定される建物の基壇は、推定幅21m、奥行き18mで、3間（13.5m）×2間（6.6m）の三間二面庇付切妻建物と考えられます。

出土遺物は、瓦、須恵器、土師器、塑像、鉄釘、鈴、銅製鏡などがあり、本格的な寺院であったことがうかがわれ、墨書土器からはこの寺が「花寺」、「石井寺（いわいてら）」と称されていたことがわかります。

寺内廃寺から出土している瓦塔片は、赤い色をした酸化焰焼成で製作され、西別府廃寺出土例と同様、軸部や屋蓋部の一部に白い色が塗られています。

寺院は8世紀半ばに創建され、10世紀半ばまで続いたと推定されていますが、この時期地方にあって、これだけの規模を持つ寺院が建立された背景には何があるのでしょうか。

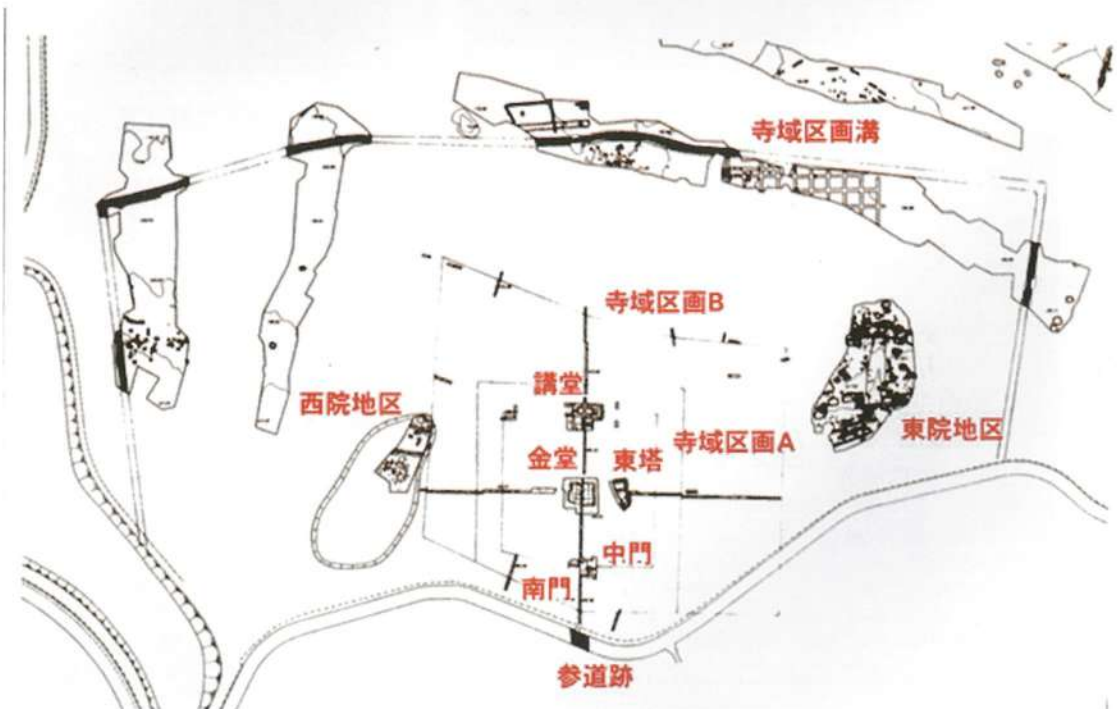


図14 寺内廃寺の伽藍配置図



图 15 瓦塔片*



图 16 素弁八葉蓮華文軒丸瓦*

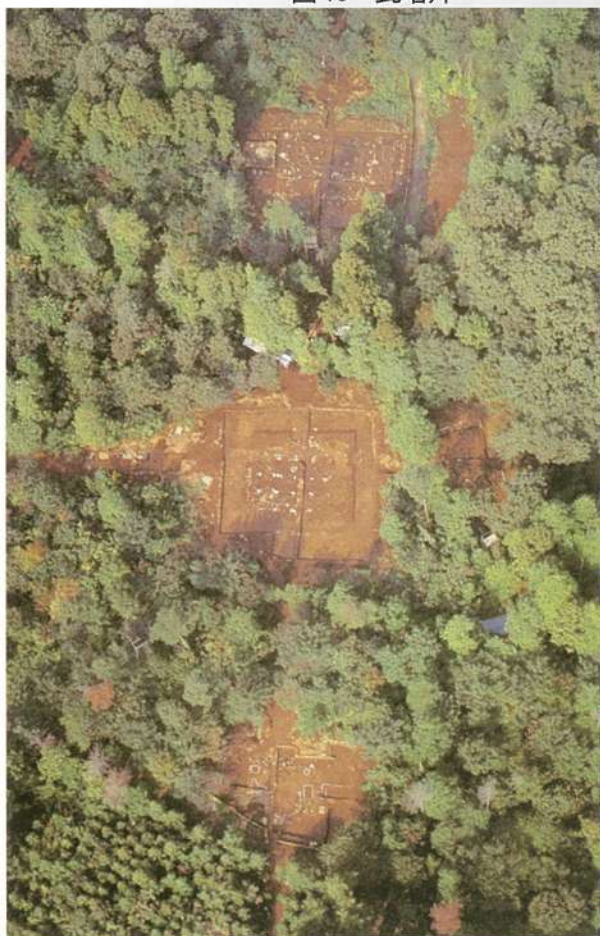


图 17 寺内廃寺伽藍跡 空中写真



图 18 四葉蓮華文軒丸瓦



图 19 偏行唐草文軒平瓦



图 20 塑像・螺髮

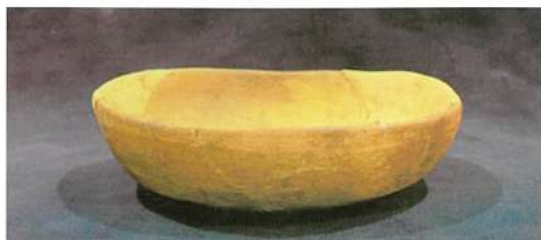


図 21 墨書土器「花寺」*



図 22 墨書土器「花寺」*



図 23 土師器・燈明皿*



図 24 墨書土器「東院」



図 25 墨書土器「花寺」*

寺内廃寺は武蔵国の中郡である男衾郡に位置します。『類聚三代格』によれば、承和 8(841)に男衾郡榎津郷（えなつごう）の壬生吉志福正（みぶのきふくまさ）が二人の息子の税を代納する申し出をしたことが記されています。また、その 4 年後の記事として、『続日本後記』には前男衾郡大領壬生吉志福正が、焼失した武蔵国分寺の塔の再建を申し出て許可されたことが記録されています。

こうした資料からは、古代男衾郡榎津郷には大領の壬生吉志福正がおり、大きな財力を

もって、仏教に深く帰依していたことがわかります。古代榎津郷は旧江南町から旧川本町にかけての地域であったともされています。

寺内廃寺の南には延喜式内社である出雲乃伊波比神社も鎮座しています。この周辺地域が古代において重要な地域であり、寺内廃寺の創建には壬生吉志が深く関わっていたことが推定されます。

4 瓦塔と瓦堂が造られたところ

瓦塔と瓦堂は、粘土を成形し焼成して造られます。その製作技法は、須恵器と共通し、瓦塔の多くは須恵器や瓦の窯で焼かれました。胎土や焼き色も須恵器や瓦と共通します。しかし、須恵器や瓦とは異なり焼き色が赤い瓦塔、瓦堂も存在します。

ここでは、瓦塔や瓦堂がどのように生産されたのか、瓦塔が造られた遺跡とその出土品を紹介します。

古代武蔵国には四大窯跡群が知られています。北から末野窯跡群、南比企窯跡群、東金子窯跡群、南多摩窯跡群です。このうち南比企窯跡群は最も規模が大きく、なかでも鳩山窯跡群は、樹枝状に伸びるいくつもの谷の斜面に窯跡が築かれた最大級の窯跡群です。

南比企窯跡群から出土する瓦や須恵器の胎

土には特徴的な物質が混入しています。白色針状物質と呼ばれ、須恵器などの表面に髪の毛ほどの太さで、2、3mm程の長さの物質が見えます。これは、海面骨針という化石由来の物質です。南比企丘陵で製作された土器類の原料として採取した粘土に含まれています。

須恵器や瓦の胎土を観察することにより、生産地を推定することができるのです。前章で紹介した西別府廃寺から出土した瓦塔片の多くにこの白色針状物質が観察でき、南比企窯跡群から運ばれてきたことがわかりました。

① 石田1号窯

鳩山窯跡群の中にある石田遺跡・石田1号窯は須恵器と瓦の兼用窯跡で、さまざまな器種の須恵器が生産されていました。興味深いものとして陶製仏殿があります。

通常の瓦堂とは異なり、1層で屋根は切妻造を表現しています。屋根は丸瓦を表す紐状



図26 鳩山窯跡群の主な窯跡の分布図

の粘土が一定の間隔で筋状に貼り付けられています。壁の外面には須恵器に付けられるような楕円波状文があり、須恵器工人によって製作されたと思われます。

石田遺跡の瓦窯跡は、7世紀後半に武蔵国最大の古代寺院である勝呂廃寺（坂戸市）の創建を契機に生産が開始された窯跡群で、8世紀中頃の国分寺創建にあたっては国分寺へ

供給されました。

石田瓦窯1号窯はロストル（溝状に火の通り道を作るための隔壁）を設けた最新式の窯の可能性があり、その技術は東海地方から来た工人によりもたらされたと考えられています。「陶製仏殿」も新しい技術の元で試行錯誤の結果、製作されたものかもしれません。



図27 石田1号窯から出土した陶製仏殿（参考資料）



図28 石田遺跡空中写真（中央の窯跡は1号窯）

②虫草山窯跡

南比企窯跡群の鳩山窯跡群の一つです。立正大学考古学研究室では昭和 35 (1960)、45 (1970) 年に発掘調査を行い、8 基以上により構成される窯跡であることが明らかになっています。窯は馬蹄形の溝で囲まれているのが特徴的です。

8 世紀後半から 9 世紀前半に須恵器を主体に生産され、南関東の須恵器編年の基準資料となっています。



図 29 虫草山窯跡



図 30 虫草山窯跡出土瓦塔片*

③新沼窯跡

旧亀井村の窯跡の中心的な存在として江戸時代から知られていました。昭和 34 (1959) 年の立正大学考古学研究室により、地下式無段登窯構造の瓦窯跡 2 基の発掘調査がされました。その後の鳩山町教育委員会による調査で、24 基もの窯が確認され、国内最大級の窯跡群であることがわかっています。

出土品には八葉蓮華文軒丸瓦、偏行唐草文軒平瓦、丸瓦、平瓦、磚があり、多くは武蔵国分寺創建期の 8 世紀半ばから後半の時期で、一部 9 世紀の須恵器も出土しています。

瓦にへら書きや刻印で郡名を記した瓦が数多く出土しています。その郡数は武蔵国 20 郡中 16 郡に及びます。武蔵国分寺を創建するために武蔵国内の各郡に割当てられた瓦を製作していたと考えられています。

瓦塔も出土しており、虫草山窯跡と並んで瓦塔を生産していたことがわかりました。



図 31 新沼窯跡

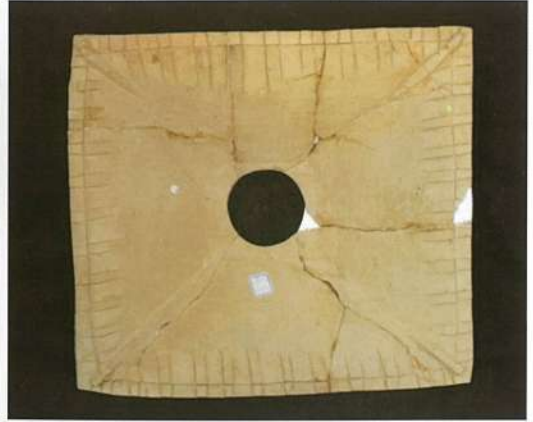
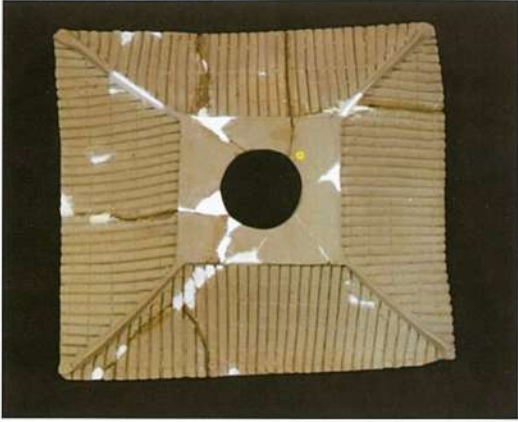


图 32 瓦塔 屋蓋部*



图 33 瓦塔 屋蓋部 軸部*



图 34 屋蓋部鬼瓦部



图 35 八葉蓮華文軒丸瓦*



图 36 偏行唐草文軒平瓦*

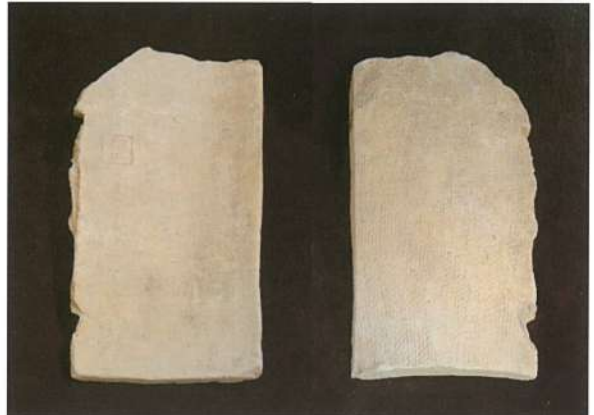


图 37 平瓦 「播中」の刻印*



図 38 柳原 A 遺跡全景

④柳原 A 遺跡

鳩山窯跡群は南比企窯跡群の東寄りに位置する一大支群です。ゴルフ場の建設に伴い、昭和 59～60（1984～85）年にかけて鳩山窯跡群遺跡調査会によって約 15 万㎡が発掘調査されました。

調査では 40 基を超える窯跡、130 軒以上の工房を含む竪穴住居跡、500 基以上の粘土採掘坑などが確認され、当時の須恵器、瓦生産の一端が明らかにされています。

柳原 A 遺跡は、調査区域のほぼ中央に位置し、西向きの緩い斜面に展開しています。調査された遺構は、工房・小鍛冶炉を伴う住居を含む竪穴式住居跡 27 軒、掘立柱建物跡 6 棟、須恵器窯跡 2 基、粘土採掘坑 561 基、土坑 6 基、溝 3 条、土器捨て場となった埋没谷 1ヶ所のほか、縄文時代の土坑 45 基に及びます。

なかでも注目されるのは、瓦塔焼成遺構です。遺構は、長径 0.83m、短径 0.76m の円形で、皿状に掘り込まれています。穴の上面にはよく焼けて赤くなった土に瓦塔の破片が含まれ、穴の底には炭化物が溜まった状態でした。瓦塔を土坑で酸化焰焼成したのでしょう。

出土した瓦塔は東山遺跡出土例に類似していますが、表現に省略した様子が見られることから、東山例よりも後出するものとされています。製作された年代は、9世紀初頭もしくは9世紀前半と推定されています。

瓦塔・瓦堂の多くは須恵器工人によって成形され、須恵器窯で還元焰焼成されています。しかし、柳原 A 遺跡で確認された瓦塔焼成遺構によって、成形はおそらく須恵器工人が関わるものの、土坑により焼成されることが明らかにされました。全国的に見て大変貴重な例と言えます。



図39 瓦塔片*

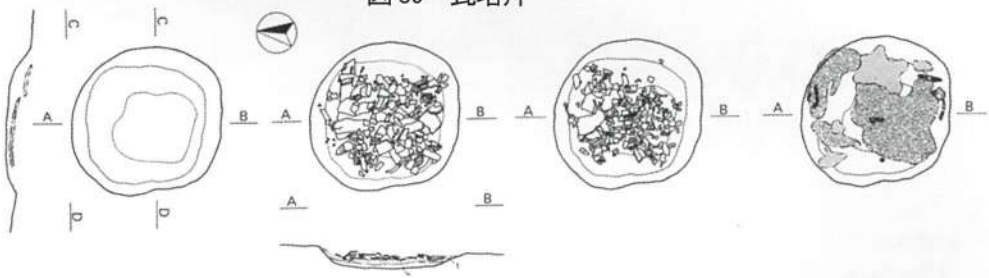


図40 瓦塔焼成遺構



図41 瓦塔焼成土坑の瓦塔出土状況

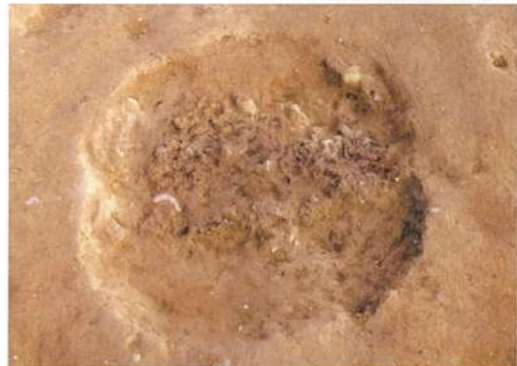


図42 瓦塔焼成土坑の炭化物等の出土状況

⑤細田遺跡

群馬県桐生市の東部、栃木県足利市に接する菱町（旧菱村）に所在します。足尾山地から連なる丘陵の南端の緩やかな斜面から、かつて瓦堂、蔵骨器、瓦等が出土しました。土地所有者から連絡を受けた当地の考古学者・藺田芳雄氏が現地を調査し、寺院の存在を推定しています。その後、藺田氏から立正大学考古学研究室に瓦堂が寄贈されました。

細田遺跡出土の瓦堂は、軸部と屋蓋部からなります。軸部の柱の表現は、正面は3間、側面と背面は2間です。正面の中央間は塞がれており、東山遺跡の瓦堂のように入口部が開いていません。屋蓋部は、入母屋造、鋸葺き（しころぶき）を表現しています。

菱町の丘陵部には窯跡が点在しています。小友川の上流部にある上小友窯跡は、立正大学考古学研究室によって須恵器窯1基が発掘

調査されています。その後、4～5基の窯跡が確認されたほか、大量の鉄滓や製鉄炉の一部、鉄塊などのほか、炭窯跡、工房跡などの遺構が確認されています。

菱町周辺は、古代には足利郡土師郷（波自可里）に属しており、土師郷は現在の足利市北西部・坂西地区から菱町までを範囲としていたと考えられています。足利市葉鹿町は「土師郷」の名を伝える地域で、土師郷の「土師」は土器作りに関わる「土師氏」に由来すると考えられます。足利市の西部地域では窯跡は確認されていませんが、製鉄跡が知られ、古代土師郷は工業地帯でした。

また、菱町の東に接する足利市の小俣町には平安時代の縁起を持つ鶏足寺があり、古くから仏教が信仰された地域です。

細田遺跡の詳細は不明ですが、こうした地域の歴史を背景としています。



図 43 細田遺跡と周辺の窯跡群



图 44 瓦堂屋蓋部*



图 45 瓦堂屋蓋部鬼瓦



图 46 瓦堂軸部·正面*



图 47 瓦堂軸部·裏面*



图 48 瓦堂軸部·左面*



图 49 瓦堂軸部·右面*



図50 上小友窯跡出土須恵器*

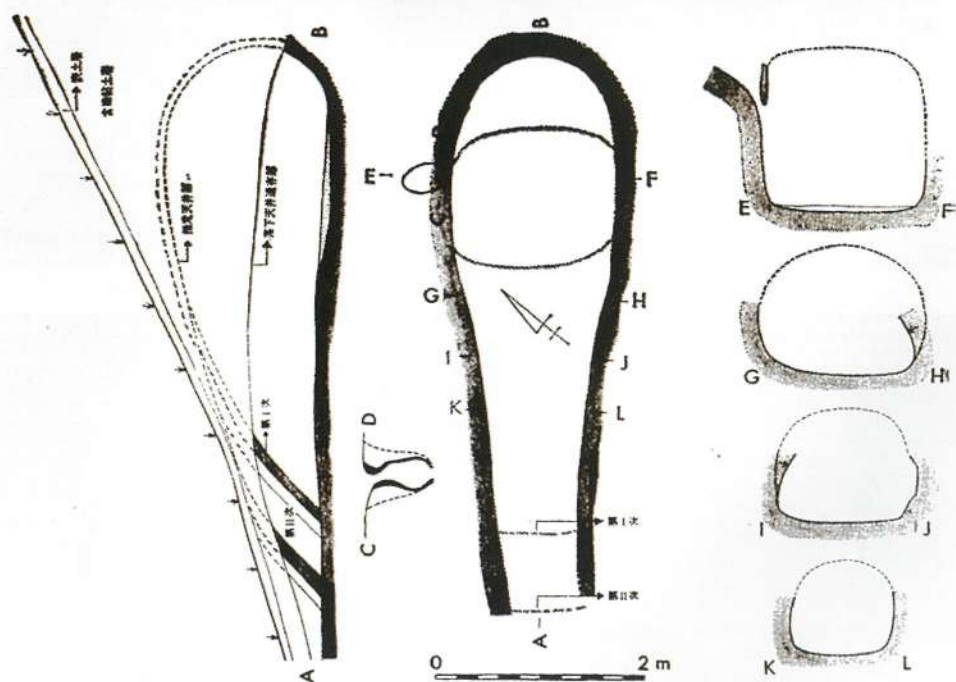


図51 上小友窯跡の窯構造

おわりに

瓦塔と瓦堂は、木造塔や木造堂に比較すると簡易なものではありますが、仏教の広がりに伴い各地に現れた伽藍そのものへの信仰や憧憬を示すものといえるでしょう。その製作も伽藍建築を構成する瓦や寺院で使用される種々の須恵器を作った工人の手になっていたこともうなずけます。

瓦塔と瓦堂の生産は、須恵器や瓦の窯で還元焰焼成されることがわかっていますが、同時に酸化焰焼成による製品があり、窯跡群の一角で焼かれていたことがわかりました。粘土で瓦塔を造形する技術は共通し、いずれも須恵器工人の手によって成形されました。

では、須恵質のものとは土師質のものとの違いは何でしょうか。まず、焼き色が違います。酸化焰焼成された粘土は、空気中の酸素を取り込み粘土の鉄分が酸化して赤く発色します。酸化焰焼成は、縄文土器以来の伝統的な土器焼成方法です。



図 52 焼成土坑による土器焼成実習の様子*

土師質の東山遺跡の瓦塔は高さ約115 cmと小ぶりです。そのほかの遺跡から出土した瓦塔片を比べても須恵質のものの方が大きいことがわかります。

窯と土坑ではその構築方法や規模も違います。瓦塔の大きさや焼成方法は、コストにも反映されるでしょう。

瓦塔の形態からは、須恵質のものよりも土師質のものの方が後出するとされています。

酸化焰焼成の瓦塔が製作された理由は、仏教信仰が広がったことにより、郡寺などの官寺だけでなく、集落などにも瓦塔の建立が求められるようになり、よりコストの低い瓦塔が造られるようになったのではないのでしょうか。また、赤い焼き色が好まれた可能性もあるかもしれません。

瓦塔については、いつどこで造られ始めたのか、何のために建てられるようになったのか、明確にはわかっていません。今後の調査・研究により解明されることが期待されます。



図 53 登り窯・益子町大誠窯*

立正大学博物館 第15回企画展「瓦塔と瓦堂」展示目録

No.	名称	員数	遺跡名(所在地)	所蔵者
1	瓦塔 水煙部	2	西別府廃寺(熊谷市西別府)	熊谷市教育委員会
2	瓦塔 屋蓋部	5	西別府廃寺(熊谷市西別府)	熊谷市教育委員会
3	瓦塔 軸部	7	西別府廃寺(熊谷市西別府)	熊谷市教育委員会
4	瓦塔 屋蓋部(酸化焰焼成)	4	西別府廃寺(熊谷市西別府)	熊谷市教育委員会
5	瓦堂 屋蓋部	3	西別府廃寺(熊谷市西別府)	熊谷市教育委員会
6	瓦塔 屋蓋部(酸化焰焼成)	2	寺内廃寺(熊谷市柴・板井)	熊谷市教育委員会
7	瓦塔 軸部(酸化焰焼成)	2	寺内廃寺(熊谷市柴・板井)	熊谷市教育委員会
8	軒丸瓦 単弁四葉蓮華文	1	寺内廃寺(熊谷市柴・板井)	熊谷市教育委員会
9	軒丸瓦 素弁八葉蓮華文	2	寺内廃寺(熊谷市柴・板井)	熊谷市教育委員会
10	軒平瓦 偏行唐草文	2	寺内廃寺(熊谷市柴・板井)	熊谷市教育委員会
11	軒平瓦 偏行唐草文	1	寺内廃寺(熊谷市柴・板井)	熊谷市教育委員会
12	土師器 坏・墨書「花寺」	3	寺内廃寺(熊谷市柴・板井)	熊谷市教育委員会
13	須恵器 坏・墨書「東院」	1	寺内廃寺(熊谷市柴・板井)	熊谷市教育委員会
14	塑像 螺髪	10	寺内廃寺(熊谷市柴・板井)	熊谷市教育委員会
15	土師器 燈明皿	3	寺内廃寺(熊谷市柴・板井)	熊谷市教育委員会
16	瓦塔 屋蓋部	3	柳原A遺跡(鳩山町大字大橋字柳原)	鳩山町教育委員会
17	瓦塔 軸部	8	柳原A遺跡(鳩山町大字大橋字柳原)	鳩山町教育委員会
18	瓦塔 基壇部	1	柳原A遺跡(鳩山町大字大橋字柳原)	鳩山町教育委員会
19	瓦塔 屋蓋部	2	虫草山窯跡(鳩山町大字大橋字虫草山)	立正大学博物館
20	須恵器 細頸壺	1	虫草山窯跡(鳩山町大字大橋字虫草山)	立正大学博物館
21	須恵器 片口鉢	1	虫草山窯跡(鳩山町大字大橋字虫草山)	立正大学博物館
22	須恵器 有蓋短頸壺	1	虫草山窯跡(鳩山町大字大橋字虫草山)	立正大学博物館
23	瓦塔 屋蓋部	1	新沼窯跡(鳩山町大字泉井字新沼)	立正大学博物館
24	瓦塔片 屋蓋部	3	新沼窯跡(鳩山町大字泉井字新沼)	立正大学博物館
25	瓦塔片 軸部	5	新沼窯跡(鳩山町大字泉井字新沼)	立正大学博物館
26	軒丸瓦 素弁八葉蓮華文	1	新沼窯跡(鳩山町大字泉井字新沼)	立正大学博物館
27	軒平瓦 偏行唐草文	2	新沼窯跡(鳩山町大字泉井字新沼)	立正大学博物館
28	平瓦 「播中」刻印	1	新沼窯跡(鳩山町大字泉井字新沼)	立正大学博物館
29	瓦堂 屋蓋部	1	細田遺跡(桐生市菱町1丁目)	立正大学博物館
30	瓦堂 軸部	1	細田遺跡(桐生市菱町1丁目)	立正大学博物館
31	須恵器 小碗	2	上小友窯跡(桐生市菱町1丁目)	立正大学博物館
32	須恵器 坏	3	上小友窯跡(桐生市菱町1丁目)	立正大学博物館
33	須恵器 蓋	1	上小友窯跡(桐生市菱町1丁目)	立正大学博物館
34	須恵器 四耳壺片	2	上小友窯跡(桐生市菱町1丁目)	立正大学博物館

関連事業・記念講演会

- ◆日時：12月11日(土) 13時30分～
- ◆会場：熊谷キャンパス ゲートプラザ1101教室
- ◆講師：池上 悟 先生 「立正の考古学」
井上尚明 先生 「古代社会の神と仏」

【参考文献】

- 新井 端ほか1995「第六章 奈良・平安時代の遺跡」『江南町史』資料編1 考古
- 池田敏宏ほか2000『古代仏教系遺物中世・関東一考古学の新たな開拓をめざして』考古学資料から古代を考える会
- 池田敏宏2000「関東地方瓦塔と他地域の比較」『研究紀要』11 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 石田茂作監修1984『新版仏教考古学講座』第三巻 塔・塔婆 雄山閣
- 石村喜英1993『仏教考古学研究』雄山閣
- 内田勇樹2012「収蔵資料紹介」『立正大学博物館館報 万吉だより』第16号 立正大学博物館
- 梅沢太久夫ほか1987『埼玉の古代窯業調査報告書（末野・南比企窯跡群）』埼玉県立歴史資料館
- 大谷徹1999『馬場裏遺跡』（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 蔵持俊輔2021『令和3年度企画展～くまがや発掘60年～ 熊谷を彩る発掘出土品展』熊谷市立熊谷図書館
- 腰塚博隆2018『西別府廃寺Ⅳ』熊谷市教育委員会
- 駒宮史朗ほか1994『埼玉の瓦塔』埼玉県立歴史資料館
- 坂詰秀一1968「上野・上小友窯跡」『立正大学文学部論叢』32号
- 坂詰秀一1964「東国における須恵器の生産と歴史的背景についての予察」『立正大学文学部論叢』第19号 立正大学文学部
- 坂詰秀一1980「窯跡出土資料による関東地方須恵器の編年」『立正大学人文科学研究年報』17 立正大学人文科学研究所
- 坂詰秀一1977『武蔵・虫草山窯跡』鳩山村教育委員会
- 坂詰秀一ほか2003『立正大学博物館第1回特別展 立正大学が発掘した埼玉の古代窯跡』立正大学博物館
- 藪田芳雄1970『菱の郷土史』菱町郷土史編纂委員会
- 高崎光司1989「瓦塔小考」『考古学雑誌』74-1
- 手島芙実子2016『新沼窯跡』鳩山町教育委員会
- 松岡喜久次2014「須恵器に含まれる海綿骨針 について」『地学教育と科学運動』73号
- 吉野 健1992『西別府廃寺』熊谷市教育委員会
- 吉野 健1994『西別府廃寺（第二次）』熊谷市教育委員会
- 吉野 健ほか2000 西別府祭祀遺跡』熊谷市教育委員会
- 吉野 健2012『西別府遺跡Ⅰ 西別府廃寺Ⅲ』熊谷市教育委員会
- 吉野 健2013『西別府祭祀遺跡。西別府廃寺、西別府遺跡 総括報告書Ⅰ』熊谷市教育委員会
- 渡辺 一ほか1988『鳩山窯跡群発掘調査報告書第1冊』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一ほか1990『鳩山窯跡群発掘調査報告書第2冊』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一ほか1991『鳩山窯跡群発掘調査報告書第3冊』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一ほか1993『鳩山窯跡群発掘調査報告書第3冊』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一1995『竹之城・石田・皿沼下遺跡』鳩山町教育委員会

立正大学博物館 第15回企画展図録

がとう と がどう

瓦塔と瓦堂

刊 行：令和3年12月2日

編集・発行：立正大学博物館

〒360-0194埼玉県熊谷市万吉1700

TEL：048-536-6150

E-mail：museum@ris.ac.jp

URL：https://www.ris.ac.jp/museum/

